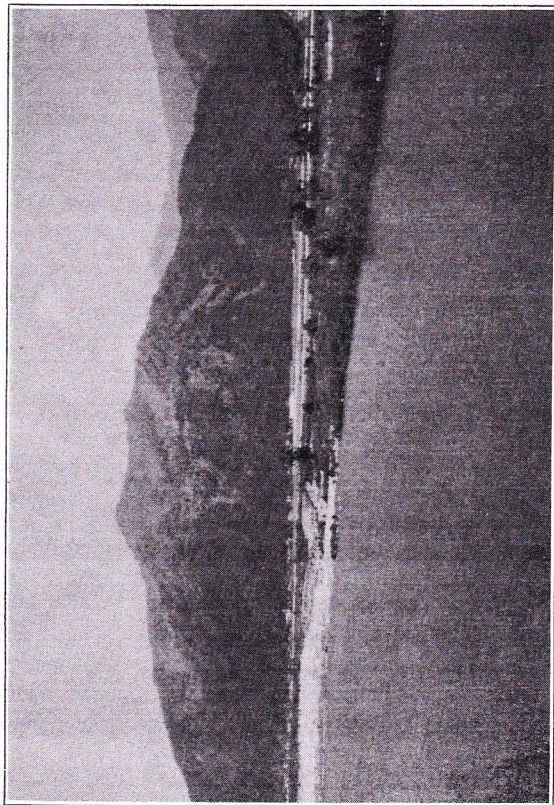


越前松本氏家系



小舟渡より見た鷺ヶ岳の全景

◇ 題字 福井県議会議員 笠羽清右エ門氏

目次

発刊によせて 勝山市長 池田勤也氏
序にかえて 北郷公民館館長 三崎 靈寿

一	北郷町と畑時能公	一
二	畑時能公の生いたち	三
三	新田義貞の越前における 歴戦のあと	五
四	畑時能公と鷹巣城	十二
五	鷺ヶ岳と畑時能公	十八
六	慶妙寺と畑時能公	二十三
七	陽雲寺にある 畑時能公首塚の由来	二十八
八	最上寺と畑時能公	三十八
九	埼玉県資料抜粋集	四十二
	あとがき	五十一

発 刊 に よ せ て

勝山市長 池 田 勤 也

近年、文化財保護への関心が高まり、先人が残された勝山市の有形無形の文化財を後世に伝えて行くことは、私達に課せられた義務であります。

そこで、勝山市は昭和四十年に勝山市文化財保護条例を制定し、市内の文化財の保護と顕彰に努めてまいりました。

伊知地古戦場は、古くは太平記(巻二十二)に「時能等城を出て伊知地山に高経の大軍と戦いこれを破る。……」と記載されており、又、越前地理便覧・越前地理指南・越前国古城跡並館屋敷蹟・越前国名勝誌・越前拾遺録等、江戸時代における数種の地誌に、伊知地古戦場が記してあります。

勝山市は、この意義ある伊知地古戦場を昭和五十六年四月、市文化財に指定いたしました。従前より、この地が北郷町民の手によって、常に整備され、顕彰がなされていることに対し、心から感謝いたします。

今ここに、北郷町畑時能公を偲ぶ会によって、「畑時能の古戦場を偲ぶ」が刊行されるにあたり、心からお祝い申し上げますとともに、編集にあられた委員の御苦勞に対し、深甚なる敬意を表するものであります。

この冊子が、広く市民の間に活用されて、畑時能公と伊知地古戦場を理解する一助となるとともに、いつまでも、この古戦場が市民の手によって、守り継がれて行く事を企願してやみません。

昭和五十七年十月

序にかえて

NHK・大河ドラマとして、数多くのドラマが、放映されてきた。その殆どのが歴史的ジャンルに終始して来たが、こうした放映によって、それらの舞台となった古戦場、或は生誕の地、戦死の地といった場所が、俄然天下の注目を集め、一躍、観光客の殺到を惹き起したと言われている。

今、この貧しい小冊子によって、世人の感興をそそろうなどという下心などは微塵もなく、また、そんな大それた期待も、希望も勿論持ち合わせてはいない。

しかし、近年、北郷町民でありながら、特に、幼・少・青・壮年の間で「畑時能」の名前さえ聞いたことがないという人の多いのは、まことに淋しいことと言わねばならない。

昭和四十七年版の大野郡誌には、

『故蹟としては、孩児走卒も熟知し、屢次画題に上る畑將軍の壮烈な終焉の地を旨として……』という讃仰の文から始まるその畑時能の史蹟の現地に生活していながら、余りにも嘆かわしい話ではなからうか。

歴史作家の中山義秀氏は、

『当時（南北朝時代）の武士達は、大義名分や勤皇思慕などはつけたして、形勢次第で、あちらに付き、こちらに味方し、無節操をきわめ、その無智蒙昧救いがたし……』と歎じていられる。

しかも、彼等にしてみれば、動乱の世に処して、自家の權益を守り、機会に乗じて、家門の繁栄を計ることは、彼等の生活の智恵であり、自衛手段に外ならなかった。そうした社会情勢下の中に於て南朝方の敗勢が既に定まり、天下は全く足利氏の掌握下にあるに拘らず、十六名の士卒と共に鷲ヶ岳山麓を舞台として満身創痍となって奮戦力闘。三千の足利の大軍を追い散らしたが、兵を纏めて帷

幕の中で休んでいる所を飯戸の間から射られ、その白羽の鏑が肩先に残り、三日間苦しみ悶えてその生涯を閉じた。始めから、負け戦であることを百も承知二百も合点しながら、戦いを挑むことは全く自殺行為であり、近代人にとっては馬鹿々々しい限りとしか考えられないとも言える。大正天皇御即位の大典に際して叙位の御沙汰が出され、大正四年十一月十日特旨を以て、正四位を贈られた。

また、北郷町に於ても昭和十六年、畑公六百年祭が執行され、伊知地畑ヶ塚を中心に熱狂的な賑いを見せた。しかし、この祭典の数ヶ月後には、日本民族が世界人類の中で初のいまわしい原爆の洗礼を受ける世界第二次大戦が勃発し、五ヶ年間の長期を経て終戦となったが、これによって、日本の国民の歴史観も大きな転換が余儀なく強えられることとなった。

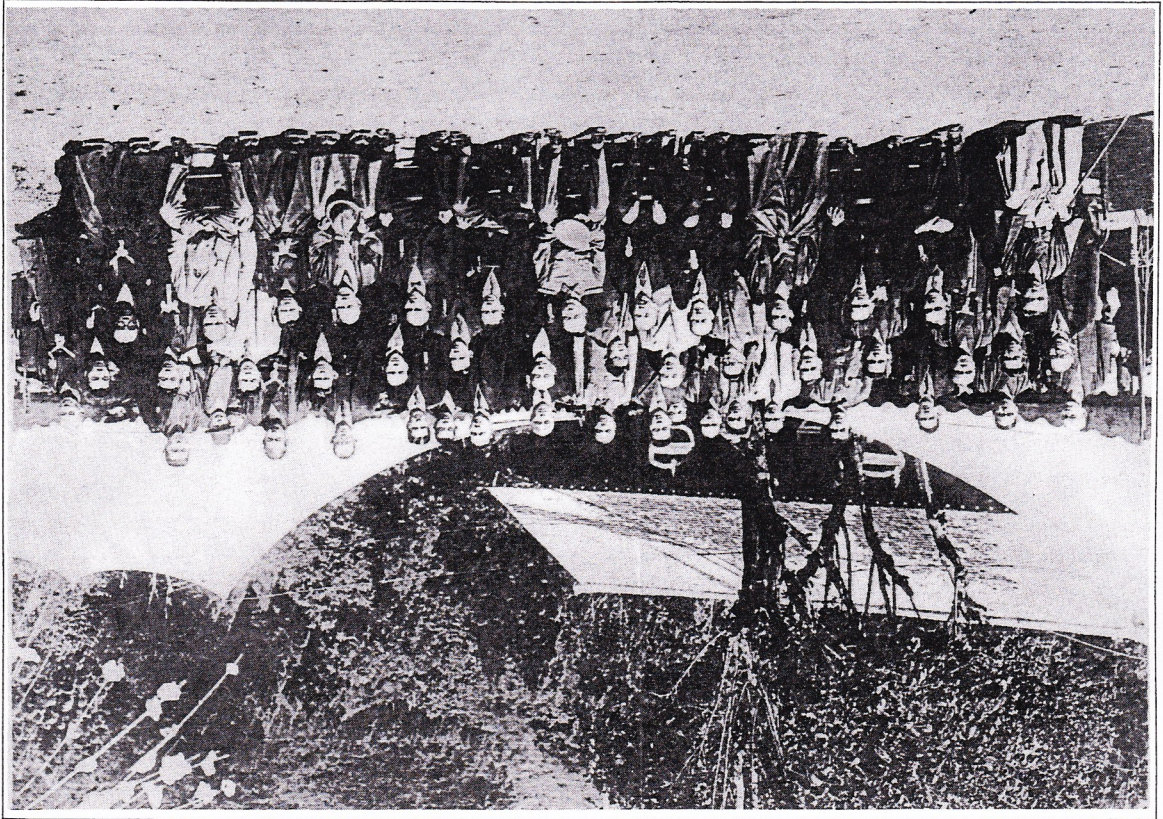
こうした時世となつては誰一人、往時の畑時能公を追慕し、偲ぶ者もなく、畑ヶ塚の建造物や、施設、附属建物も荒れるに任ず感がある。鷲ヶ岳頂上の、石碑も、昭和二十三年福井地方の地震に倒れたまま、三十年近くも放置されていた。

やがて、時至り、機熟し、昭和五十一年北郷壮年連絡協議会の提唱により、町民鷲ヶ岳登山が毎年の行事として行われるようになった。

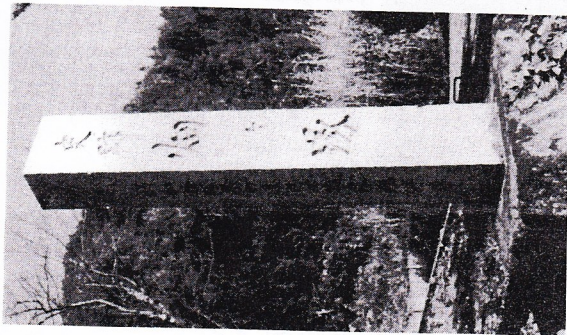
そして昭和五十四年、県より、生活会議を設立するよう呼びかけられ、我々同志は、畑公を偲ぶ運動を展開することとした。

戦後三十有余年、自由平等の民主主義も全く予想に反し、社会規範を無視する無軌道、無節操の人士の多発する事態を見聞する時、憎悪感や嫌悪感さえ強く感ずる。

より良き郷土社会建設のために、己が信念に殉じて悔なかつた畑時能の忠節を斟酌して見ることも、あながち無益ではないだろう。



一、北郷町と畑時能公



畑ヶ塚入口にある標柱

畑ヶ塚は昭和八年、伊知地の四十四字十番地、俗称御墓堂に建立された。（四間×五間）

拝殿参道は、昭和十五年七月に区民の奉仕作業によって整地された。

これは、畑時能公の六百年祭執行の計画で、時の村長石川奎左エ門氏、村岡鋤一北郷小学校長、村会議員、区長等の名士により、畑時能公奉賛会が発足した。

やがて、昭和十六年十月二十五日、時の福井県警本部長、猪野毛利衆議院議員、今上陛下の御進講係をつとめられた東京大学教授、平泉澄先生等々の有名知識人や多数の名士の参列を得て、畑公六百年祭が行われたが、北郷小学校児童を始め、近郷近在の住民多数が、畑ヶ塚

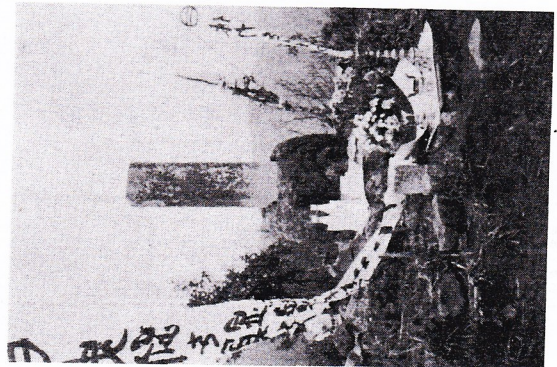
を中心として、伊知地区全域を埋めつくし、いとも盛大に営まれた。時、恰かも皇紀二千六百年に当る佳き日でもあった。

昭和十九年四月七日、大戦争も頂点に達した頃おい、福井県より史跡として指定された。

その後、地元伊知地区の行事として、老人会等の奉仕作業のもとに、市長、教育長の臨席の上、畑時能公祭が執行されてきた。

又、昭和五十一年十一月、北郷町壮年連絡協議会の提言から、鷲ヶ岳登山道及び、山頂の碑の整備等が行われ、毎年町民登山が行われるようになった。

勝山市の史跡文化財に指定されたのは、昭和五十六年四月になってからである。

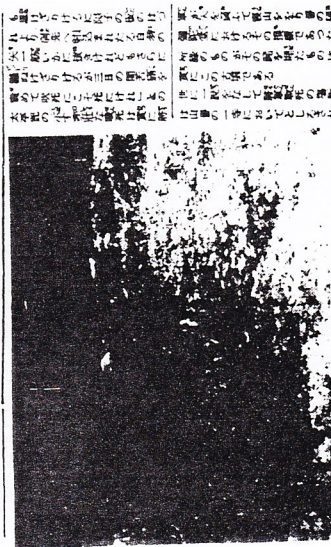


地の死戦能時畑

問題の伊知地山は 大野郡北郷村に

古墳が発見さる

能時公の死戦地といわれる畑は、大野郡北郷村にあり、伊知地山といふ山に接する。この山は、古くから名勝地として知られ、戦国時代には、能時公の死戦地として有名である。この山は、大野郡北郷村にあり、伊知地山といふ山に接する。この山は、古くから名勝地として知られ、戦国時代には、能時公の死戦地として有名である。



安説 ほんが、その山に、伊知地山といふ山に接する。この山は、古くから名勝地として知られ、戦国時代には、能時公の死戦地として有名である。

石塔 ほんが、その山に、伊知地山といふ山に接する。この山は、古くから名勝地として知られ、戦国時代には、能時公の死戦地として有名である。

この山は、古くから名勝地として知られ、戦国時代には、能時公の死戦地として有名である。

いよく迫る防空演習 爆弾瓦斯火災 福井防護演習

防空演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。この演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。この演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。

防空演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。この演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。この演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。

防空演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。この演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。この演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。

發煙筒の説明

防空演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。この演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。この演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。

防空演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。この演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。この演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。

防空演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。この演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。この演習は、いよいよ迫る。爆弾、瓦斯、火災、福井防護演習。

一、畑時能公の生ひたち

古今無双の剛勇といわれ、万夫不当の武將を以て聞える、畑六郎左衛門尉時能公は武藏国（今の埼玉県）秩父郡野上村藤谷淵を郷里として、正安元年（西暦一二九九年）九月十五日、父は畑佐渡守風時、母は久納養哲の娘を両親として生れた。

体軀は人並みはずれて大きく頑健であつて、幼い時から相撲を好み、関八州に敵する者がなかつたと言われた。又、狩を好み、馬に乗って山野を駆けめぐり、童名を荒熊丸といわれる暴れん坊であつた。

成人してからは、新田義貞公に仕え、大小百余の戦に出陣し、数々の手柄をたてた。

当時、後醍醐天皇は天皇親政を実現すべく、鎌倉幕府を倒し、皇室中心の中興政府を作り上げたものの、足利尊氏は武家政府の再組織を志して、後醍醐天皇から離反、中興政府打倒の軍を起した。

これが南北朝の幕明けとなった。

武家の棟梁として、幕府の再興を志す足利尊氏と、同じ源氏の一族でありながら、しかも一方の旗頭である新田義貞とは避けることのできない宿命的な対立となった。

あくまでも、武家政権を掲ぐ足利尊氏に対して新田義貞は、北畠顕家と協力して、延元元年（西暦一三三六年）正月、尊氏を九州へ敗走させたが、九州一円を平定して力を盛り返した尊氏は、弟直義と共に、同年五月、海陸から大軍を率いて京都を目指して攻め上つてきた。

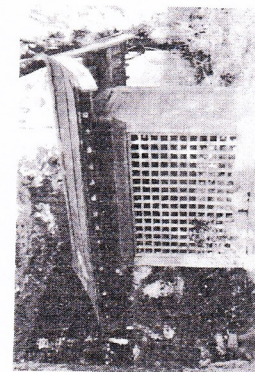
新田義貞や、楠木正成は兵庫にこれを迎撃し、激しく戦つたが、正成は湊川において戦死を遂げ、後醍醐天皇は、皇太子恒良、皇子尊良の両親王を新田義貞に託して京都に還幸された。

義貞は、両親王を奉じて北国を治めるべく、わが越前の国に下向することとなった。

義貞の北陸下向は曾って、越前の守護職だったことと

敦賀の氣比神宮が、親王方と密接な関係にあつたので、氣比神宮の協力を得て、金ヶ崎城に立籠つた。

尊氏は大軍を動員して、金ヶ崎城の攻撃を開始すると共に、光明天皇を擁立した。同時に、後醍醐天皇は吉野



畑ヶ塚に建立されている御堂

山に潜幸されたので、ここに南北朝が分立することとなった。

こうした状況の中で、金ヶ崎城の攻防戦は地獄図絵の如き無類の凄絶をきわめた激戦であったが、少数の兵力が大軍を相手では如何ともしがたく、この金ヶ崎城は無念にも延元二年（西暦一三三七年）三月、ついに落城。

義貞が奉じた恒良親王は自害され、尊良親王は北朝軍に捕えられ、京都へ送られて間もなく、悲運の一生を閉じられた。

時に、恒良親王は二五才、尊良親王は十三才であった。

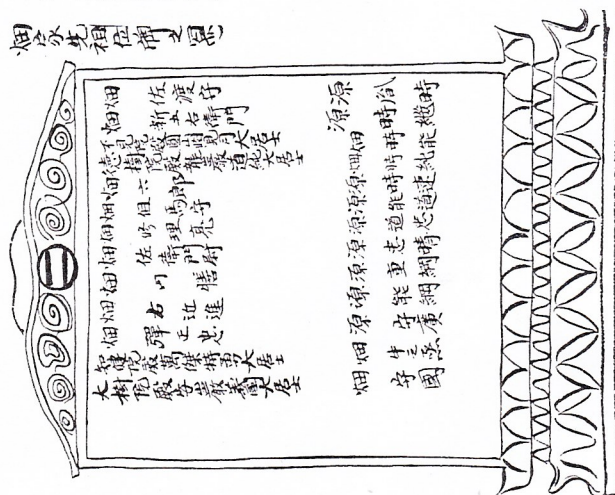
これに先立ち、新田義貞はひそかに金ヶ崎城を脱出、杣山城（南条町）に移り、反撃の策をめぐらし、北朝の武将、足利高経の籠る足羽黒丸城（福井市黒丸）並びに、平泉寺衆徒の籠る藤島城の攻撃を決意、本宮を出たが、不幸にして燈明寺畷（福井市）で戦死。三十八才の若さで、越前の露と消えた。

畑時能公は、その後も義貞の意志を継いだ弟義助を助け、越前湊城を守り、金津・長崎・坂井郡三国の諸城を攻略し、鷹巣山に城を構えた。

この鷹巣城に対して、敵将、足利高経が兵三千余人を以って攻めたてたが、容易には陥れることができず、荏苒、持久戦の様相を帯びてきた。

時能公は夜陰を利用して攻撃を仕かけ、しばしば奇襲攻撃をするなど、敵軍を悩ませていたが、かくては果てじと、興国二年（西暦一三四一年）伊知地山、現在の勝山市北郷町伊知地鷲ヶ岳に転進したが、同年十月二十五日、南朝方最後の武将として壮烈な戦死をとげた。享年、四十一才にて終始南朝の忠臣としての生涯を終えた。

（埼玉県資料転載）

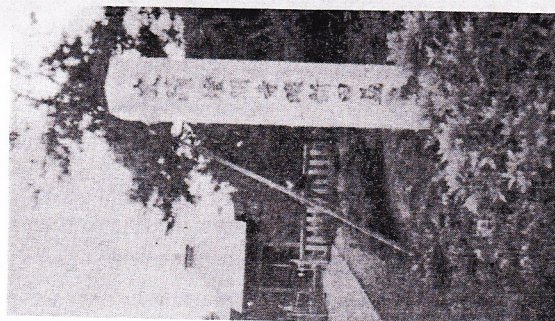


二、新田義貞の越前における

歴戦のあと

西国へ落ち延びた足利尊氏氏は、捲土重来、九州を平定し、湊川に楠木正成を亡ぼし、新田義貞の軍を破って都入りを果たした。擁立した光明天皇に、三種の神器を譲って貰いたかったため、後醍醐天皇に京都へ帰られるよう奏請した。天皇は義貞に「越前に下って再挙を計り、賊徒討伐の準備をして欲しい。」と言われ、恒良親王に譲位の式を行なわれた。義貞は三種の神器も譲られたに相違ないと満足して恒良親王と、皇子尊良親王を奉じて、延元元年（一三三六年）十月九日夜、東坂本日吉の山王社に参拝し、堅田より琵琶湖をわたり、梅津に上陸して大雪の中難行軍を続けた。やがて、大宮司氣比氏治の迎える中を越前、金ヶ崎城に入城し、一先ず越前の国に着くこととなった。

早速、義貞は弟義助を杣山城主、瓜生保のもとに、また、わが子義顕を越後に派遣して一斉に兵を挙げようと考えた。そして、義助に一千余騎。義顕には二百余騎をつけて杣山城と越後へと出発せしめた。瓜生保は大いに喜び、弟の照、重等兄弟三人で義助、義顕の両將を鯖波の瓜生寺まで出迎え、大いに歓待したが、武生の新



新田塚

善光寺にいた賊軍の斯波高経は、保を籠絡。保は杣山城へ上り、直ちに関を鎖した。

この時、保の弟（瓜生寺の義鑑房）は義助、義顕に報告したので、義助の子（十四才の義治）に里見伊賀守時成と藤沼某にこれを輔佐するように命じ、兵をつけて杣山の今後のことは義鑑房にまかせ、急遽金ヶ崎城に還る事になった。

義助、義顕が今庄までやってくると、入道浄慶が砦を今庄に設けて道を塞いだ。

この浄慶は以前、義貞が金ヶ崎に入城の途中、坂本まで供をした者である。だから、義助は由良由光を使に立て「作戦計画のため、杣山より金ヶ崎に向う途中であるから、速かに通さるよう。」と説得させた。

ところが浄慶は

「私の親の久経は、あなたの味方として武恩を受けたであらうけれども、今、この浄慶は斯波高経に深く頼まれたから、もし、あなた方をお通し申したら罪料はまぬがれません。だから、名ある方の首を一、二頂きたい。すればそれが合戦した証拠となり、わたしの申開きもできるでしょう。」

と。由良はこのことを帰って報告すると、義頭は「それはもったもである。

されど、わが部下は親子にも優るかわいい若共である。たとえ、自分が兵士の命に代るとも、兵士の命をもって自分の命には換え難い。今一度、行ってこの旨申して見よ。」と。

由良は再び行って説いたけれども、さらに聞き入れようとはしない。

これでは、義助、義頭等が危いと考えて、「さらば、止む得ない。この首一つ進せよう。」と、鎧の上帯を切り捨て、将に刀を抜いて自ら割腹しようとした。

この様子を見た浄慶はあわてて走り寄り、由良の手を押しとどめ、「お志しよくわかりました。この浄慶はどのような目に合おうとも構いません。

佐々木忠枝を越後の守護代として越後の義軍を寄せ集めたり、加賀の義兵を集めたり、平泉寺の衆徒に働きかけ、再挙を計った。そして、次第に勢力を恢復して来た。尊氏はこれを見て、京都にいた高経と弟の家兼を将として兵六千を率いて越前国府（武生）に進駐。義貞追討を命じた。

延元二年の冬から同三年の春頃にかけて、新田義貞の部将で、四天王の随一と謳われている畑六郎左衛門時能は、細呂木附近に城を構え、加賀の敷地伊豆守、山岸新左エ門、上木平九郎等と協力して、津葉五郎の大聖寺城を攻略。遂次進出して、坂井郡の長崎、河合、川口に砦を構え、遥かに、府中（武生市）進撃の勢を示すようになり、その兵力も三千人に達した。平泉寺の衆徒もこれに応じ、鯖江の東北方、約八軒地点の三峰に要塞を作り同地の河島惟頼と協力することとなった。

足利高経は三千余人を国府に残し、他の三千人をして三十余城を構築して数ヶ月間は相い対峙していた。

義貞、義助等の連合軍は延元三年二月、高経と目野川を挟んでの合戦が展開され、官軍の連合軍の大勝となった。

次いで官軍約三千人が、府中の東方地域の集結したの

「サァ。どうぞお通り下さい。」

と言って柵を取り除いて部隊を通すことにした。

義助は「後の証拠にせよ。」と、黄金作りの太刀を浄慶に与えて金ヶ崎城に向った。しかし、大軍の包囲の中にある城へは容易には入れないので、奇計を用いて難なく入城した。

年明けても戦況には変化が見られないので、尊氏は、高師直に兵六万をつけて、正月十八日に猛然と攻寄せたが、撃退させられた。

二月十二日には、官軍の逆襲が見られたが、その中に城中の糧食や武器の欠乏が目立って来る。海の魚を釣ったり、機菜を採る間は良いが、しまいには馬を殺して飢えをしのぐようになったので、義貞は義頭に城を守らせ義助と杣山城へ転進して兵を募った。

しかし、金ヶ崎城は延元二年三月六日に陥落。義頭と尊良親王は自害。城中、一六〇名中、降服者十二人、岩の中に隠れて生き延びた者四人。その他は全て自害。恒良親王は捕えられ、京都にて非業の御最期を遂げられた。

かくして、義貞、義助らが杣山城に潜在していた救援の目的は達せられず、官軍は一挙に衰え、自領を失った。

しかし、義貞はこれに挫けず、同年三月十四日には、

を見て高経は大いに驚き、弟、家兼と共に三千余人を率いて、府中の北方に出撃した。時は雪解け水が溢れ、流れも急であったが、船田長門守経政の葛新左エ門は白馬に跨がり、三尺六寸の太刀を真向に振りかざし、浅瀬に馬を進めると官軍もまた続いて馬を乗り入れ、流れを乱し、河を渡って上陸。河島惟頼の一隊は平泉寺衆徒と協力して、府中の南方に進出、市街に火を放ちて新善光寺城へと迫った。

高経が居城に入るのに、官軍の迫撃が急で意の如くならず、自分達が構築した木戸や逆茂木の障害物のため遅られ混戦乱斗の後、一部は家兼が率いて米浦方面から若狭国に、主力は高経が率いて大虫、織田を経て迂回すること十余里、漸く足羽地方に脱出し、大黒丸城に退却して敗兵を收容した。義貞はこれを急追せずに諸隊を集めて府中の城に入った。

このようにして、義貞が予てより意図していた越前経略の第一歩としての拠点を獲得することができて官軍の志気は大いに揚った。

この義貞、再挙を聞いて、戦わずして配下への参集してくるものが続出した。大平記によると、越前国の城の落つること七十三箇所、その勢力は越前の南半部に及ぶといわれている。

この年の二月、日野川の府中附近で戦いに敗れた高経は、足羽方面（福井市近傍）へと退いて、北の庄、安居、南江守、波羅密、勝虎、小黑丸、藤島の七城を構築。本拠を黒丸城に置いて、相互に連絡、応援の策を検討した。城の周域に水流を引き、路を塞ぎ、壕を掘り、橋を撤去して防備を固め、塁を高くして守備の万全を期し、義貞に対抗する防護体制を確立した。

一方、尊氏は美濃の土岐頼貞、能谷直経を越前に派遣して高経を援助させることにした。

延元三年（一三三八）五月二日、義貞は自ら六千余人の統帥者となり、府中に本宮を設定し、諸隊の部署を割当て、攻撃準備を整え、南方からは江守、波羅密、安居の砦を攻めると同時に、遠く藤島の東方地区から迂回して、河合、春近庄（針原）方面に出て、北方から勝虎附近の砦を攻めさせた。

江守方面攻撃隊の五百余人は江盛を攻略したが、足羽山下の黒龍明神前で木田城の守兵と交戦して足羽川を渡ろうとしたが、戦い利あらず後退した。

安居方面攻撃隊の七百人は日野川の渡河を開始したが、細川出羽守の率いる二百余人に対岸より猛射を受け、激流は人馬を呑み、ついに攻撃頓挫して後退した。

迂回の際細屋秀国の麾下の千余人で遠く足羽、藤島

しかし、黒丸城の高経の手兵、わずかに三百人という兵力であったが、京都男山八幡宮で、北畠顕信・新田義興等が天下分け目の戦いとして、死守した八幡城が陥落したとの報せを聞いた城中の志気は大いに振い立ち、死守する決意を固めて、頑強に抵抗することとなった。

しかも、戦機は次第に熟して漸て両軍が衝突する直前となつてから、藤島城に陣取っている平泉寺衆徒五百が賊軍に加担して、義貞の軍を牽制し始めたため、官軍の作戦は大きく狂い始めた。

それは、元来、藤島の庄は平泉寺領であったものを、鎌倉時代になって延暦寺領となつたことを不満に思っていた平泉寺衆徒達であったので、高経の窮状につけ込んで、藤島の庄を平泉寺に返すならば援助しようと申し出たので、高経は大いに喜んでこれを承諾した。

義貞はこうした状況に対応する周到な用意を練り直さねばならなくなった。

閏、七月二日（陽暦八月二十五日）河合荘附近に集中した三万余人の軍勢の閲兵を行い、本宮を灯明寺まで進めて、全軍を各砦に分けて黒丸城を始め、これを援護する城砦を攻撃するために味方の軍を七手に分け、その攻撃目標とする敵に対する城を築き、相手方の相互連絡を遮断した後に、各隊毎に敵の諸砦を攻撃する事と決定し、

の北方に迂回して春近に出て陣を河合庄に構え、河合の庄の森田、河合の諸部落にて攻撃準備をして九頭竜川を渡り、船橋村の黒頭竜砦を包囲し、壕を渡り、堀を乗り越えて、進撃した。しかし、敵將、勝虎と一兵衛はこれをよく支えていた。鹿草兵庫助は三百余人で高木の砦から進出して来て、細屋隊は前後に敵を受ける羽目となり混乱して本陣へと退却した。

越後に赴いた新田一族は義貞が速かに上洛して京都を回復しようという計画を知って、大井田彈正少弼・同式部大輔中条入道・鳥山左京亮・風間信濃守・弥智掃部助等の諸將を始めとして、その軍勢約二万余人が六月三日、国府（高田）を出発し、義貞の下に参集しようとした。その途中で、越中の国守護、普門藏人利清はこれを阻止しようとして抵抗を試みたが駆逐せられ、加賀の富樫介の軍兵五百余人も追っ払われ、越前へと進んで河合に到着した。

今や、義貞の麾下の総兵力は三万余人と脹れ上った。

義貞はいよいよ九頭竜川を北に渡り、河合荘の石丸城を拠点として、背後より、黒丸城の攻撃を策した。七月二十一日を期し、総攻撃を開始することに決し、黒丸城の外濠を埋めんがための埋草を三万余荷、その他、桶の板三千帖を集積して、攻撃準備に努めた。

細部の作戦は担当指揮者に委ねることとした。

太平記巻第二十の項には次のように述べている。

大将義貞は灯明寺の前に控えて、手負の実験をして、おわしけるが、藤島の戦、強うして官軍ややもすれば追立てらるゝ体に見えける間、安からん事に思われけるにや、馬に乗り替え、鎧を着かえて僅かに五十余騎の勢を相従え、路をかけ、畔を伝ひ藤島の城へぞ向われける。

その時分、敵の黒丸城より、細川出羽守・鹿草彦太郎両大将にて藤島を攻めている寄手共（新田勢）を追払わんとて、三百余騎の兵にて構喉を廻けるに義貞、まともに行き合い給う。

細川の方には徒歩にて、桶を持ちたる射手共多かりければ深田に走り下り、前に持つ桶を衝き並べて、鎌を支えて散々に射る。義貞の方には射手の一人もなく、桶の一帖をも持たせざれば、前の兵、義貞の矢面に立塞つて、只的と成てぞ射られける。

中野藤内左エ門は、義貞に目配せして「千鈞の弩は鼯鼠のために機を發せず。」

と、申しけるを

義貞、聞きもあえず、

「士を失して独り免るゝは我が意に非らず。」

と、いいて、尚、敵の中に駆け入らんと駿馬に一鞭

を進めらる。この馬 名譽の駿足なりければ、一、二丈の堀をも全然たやすく越えるが、五節まで射立られたる矢にや弱わりけん。小溝一つを越えかねて、屏風を倒すが如く 岸の下にぞ ころびける。

義貞、弓手（左手）の足を敷かれて起き上らんとし給う。処に白羽の矢一筋、真向のはすれ、真中にぞ立たるける。急所の痛手なれば、一矢に目くれ、心 迷いければ、義貞 今は、叶はじとや思いけん。抜いたる太刀を左の手に取り渡し、自ら首を掻き切って深泥の中にかくして、その上に横つてぞ伏し給いける。

越中の国の住人で、氏家中務丞重国は魅いに走って行ってその首を切つ先に突きさし、鎧・太刀・刀等を取って黒丸城へ帰って行った。

氏家は、戦がすんでから、高経の前へ出て「わたしは新田の一族かと思われる人の首を取って来ました。誰とは名乗りを挙げなかったので 姓名の程は知りませんが、馬とか武具など、そしてつき従っていた武士たちが この死骸を見て、腹を切って殉死した事など、只の武者とは思えません。これは死人の膚につけていたお護りです。」

といって、土のついたままの首に、泥だらけのお護りを出すと、高経はこの首をシーツと見ていたが、

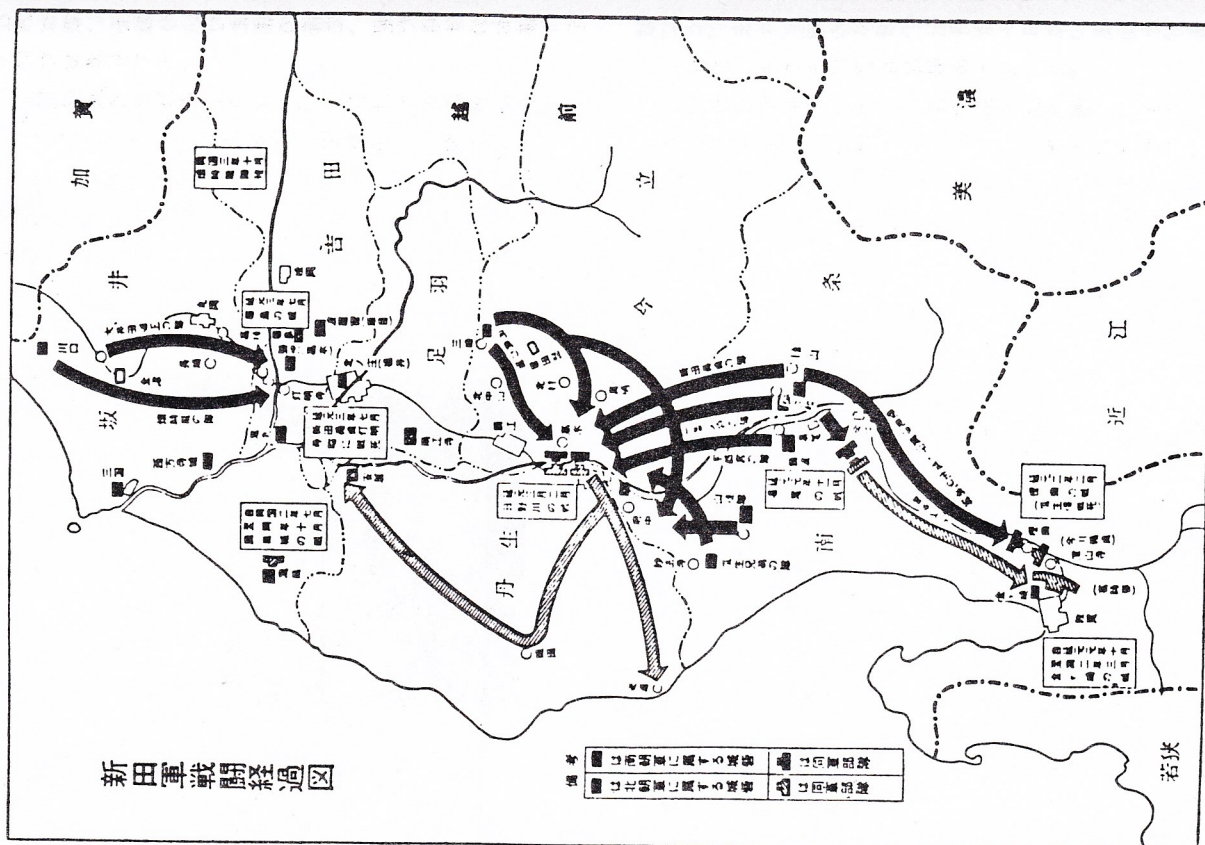
「あら不思議や、世の中には 新田義貞公と こんなにも似ている顔があるものだろうか。もし、義貞公であれば、左の眉の上に矢の疵があるはず。」

と言って、櫛を取り出し、髪の毛を掻き上げて、血をすすぎ、土を洗い落として見ると、予想した通りの疵の跡があった。

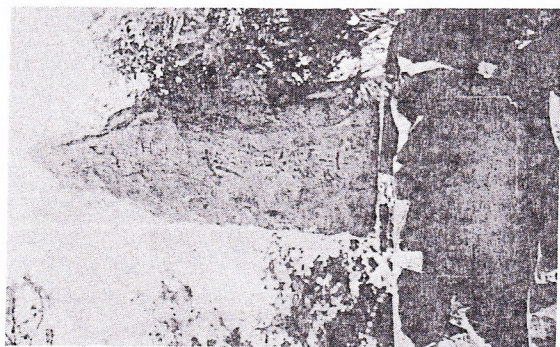
また、身につけていた二振の太刀を調べてみると、一振りには、鍔元に、金の上に銀文字で鬼切。別の太刀には、銀の「はばき」の上に鬼丸が入っていた。これは二つ共源氏重代の重要な宝物で、義貞方の系統に伝わっていたものだ。また、お護符の中を調べて見ると、後醍醐天皇の直筆で、義貞が武門の誉れと喜んだ裏書きがあった。

「早く 朝敵征伐をしてくれ、義貞のみが頼りだ。」との書状であつたので、もはや義貞の首に間違いなしとして、時宗の僧侶八人に義貞の遺骸を輿に乗せて、丸岡町・長崎の往生院へ送って葬礼を執行し、首は朱の唐櫃に入れ、氏家重国をつけて、こっそり京都へ届けたが、これは朝敵の頭領といって、都大路をひき廻し、さらし首にされた。まことに哀れな最後となつた。

福井市史より転載



四、畑時能公と鷹巣城



(鷹巣村誌より転載)
鷹巣山頂にある鷹巣城址

福井市街地から、県道、裏を西進、川西町を経て谷あいに登って行くと、高須町に出る。市の中心部から二十数キロ、車で約三十分。こうした山間の集落にある鷹巣小学校の西方に、お碗をかぶせたような険しい山容の鷹巣山(標高四三八米)が聳えている。

これが、今から約六五〇年の昔、南北朝動乱の時代に、歴史の脚光を浴びた新田義貞の勇武の将と恐れられた畑時能公が、この山頂に立籠り、北朝方の足利軍勢と壮烈な戦いを繰り広げた所である。

延元三年(一三三八)年七月二日、霧の深い夕刻、新

いて府中に帰り、再挙を計った。

やがて、八月には、その一隊が金ヶ崎城に入城し、翌四年(一三三九年)の初め頃には、鳥羽城、東郷中島城、浅水城、西方寺城などの数ヶ所を占拠、小ぜり合いは絶えなかったが、その間隙を衝いては、畑時能は湊城を進発し、金津城、長崎城、河合城、河口城等の敵の城を撃破し、首を斬る事八百余人、女や子供に至るまで殺戮したと記されている。

七月五日には、由良光氏が西方寺城を出発して、和田、江守、波羅密、深町、安居等、敵の嚴重に構えた六ヶ所の城を二日間で攻め落とし、同じく五日、堀口兵部大輔氏政は五百余騎を率いて、香下、鶴沢、穴間、河北等の十一ヶ所の城々を五日間で攻略して、降服者千余人を引きつけて、河合庄へ集合した。

総指揮官の脇屋義助は、称津、風間、瓜生、川嶋、宇都宮、江戸、波多野等の軍勢三千余人を率いて、国府を出発して、三手に分かれて、織田、田中、荒神峰、安古渡の城々十七ヶ所を三日三夜で攻め落とし、兵五百余人を討って、河合庄へと集まってきた。

そして、十六日には、官軍が四方から集まって来て、六千余騎と腹脹上がり、黒丸城を三方から挟んで攻め立てる体勢ができた。

田義貞が灯明寺畷にて戦死したことによって、南朝方は大きな支柱を失い、急速に勢力を弱めて行っただけでなく、吉野朝廷にとっても大きな打撃となった。

脇屋義助は、河合の石丸城に帰って、義貞の行方を探したが、始めの間、はっきり知っている人が居なかったけれども、やがて、討たれたと解ったので、義助は、「早速、黒丸城へ攻め寄せ、義貞公の討たれた所へ行って、同じように討死することになろう。」

と言ったけれども、兵士たちは、いつの間にも、元氣もどこかへ消え失せて、中には、心替わりする者も出てくる始末で、その晩のうちに石丸城へ、三回も放火する者があった。また、義貞の近習として、側近に仕えていた二人も、夜中に逃亡してし。本心から菩提を弔う積りが疑わしいが、出家をして見たり、中には縁故を頼って、黒丸城へ降服して敵方に帰順するなど、昨日まで、三万騎に余った大軍も、一朝にして、僅か、二千騎にも足りない勢力に、変わり果てて了った。

かく、みじめな形勢に於いては、北国地方を押えることは、至難というので、三ツ峰城には、河島維頼を、柳山城には、瓜生兄弟を、畑時能には、三国の湊の千手寺城にと、夫々、固めさせ、七月十一日に、義助と、義治父子は、称津、風間、江戸、宇都宮の七百人の兵士を率

戦将であった河合孫五郎種経が降服して来たので、畑時能はこれを自分の配下に入れて、城の周辺を夜を徹して、関の声を上げておびやかしたり、遠矢を射かけたり、やがて、後続の兵が到着したら一挙に城を攻め落す気配を見せた。

その時、城の中にいた上木平九郎家光(元官軍)が、高経に、

「この城が、この前の戦で、新田の大軍が押し寄せて来たのに落城せなかったのは、武運が幸いした事で、今度も又、そのように、敵を退けることができるとお考えでしたら、思慮がご不足かと思ひます。そのわけは、この前攻めて来た新田の軍勢は、皆、東国、西国の、この土地不案内の者ばかりだったので、深田へ馬を突込ませたり、堀溝に嵌まって、名将といわれた新田義貞が、あたら流れ矢のために戦死する事態を惹き起したのですが、こんどは、今まで、味方だった者が、敵方に多くなったので、城の様子も、土地のことについてもよく知っています。そればかりではありません。敵方の畑時能という武將は、日本一の大力無双の豪傑であつて、畑時能はこの城一つに、全生命を賭けてやっていますから、この畑と、互角に勝負の出来る者は味方には一人もいません。後攻めの用意もないこんな平城に、高経殿のよう

な立派な方が 僅かな兵力で死守して、もしも、命を落されるような事になったら、口惜しい 御計画と申さねばなりません。

どうか、今夜のうちに、加賀の国へ後退され、京都からの味方の救援部隊の到着を待って、再び、兵を集めて敵を倒すことが、最善の策と考えます。」

と、献策した。

諸将も、高経も、これに同意し、黒丸城では、先ず、高経が去り、朝倉某外十七名が残留し、高経が一里程退却した頃合を見計って、残留者が各城に火を放って、加賀国那谷の富樫城へ逃避した。

これで、一応、足羽黒丸城は、官軍が占領することとなり、義助は 義貞の討たれた恥を雪ぐことができ、越前の国は、一時、全く 官軍の勢力範囲に入ったわけである。

そして、延元四年（一三三九年）八月十六日に、後醍醐天皇は、その志が まだ 実を結ばないことに心を痛めながら、右手に剣を握り、左手に珠数を持って、吉野の行宮で崩御なされた。そして、同十月、後村上天皇が即位され、義助に特別に詔を下し、義貞の偉業を継ぐようにと申し送られた。

やがて、興国元年（一三四〇年）ともなると、足利尊

やってきて、官軍へ協力するよう 頼んだけれども、も早や瀕死の状態にある官軍方へ味方しても拙らぬ話と、力を借してくれる者が全てなくなってしまったので、畑時能の鷹巣城へ畑時能と共に立籠ることとなった。

足利勢に於いては、二、三十人の僅かの兵力位と捨てて置くと、畑時能の勇武、一の井氏政の智謀も、場合によつては、天下の大事になる懼れもあるからと、足利高経、高上野介師重を両大將として、北陸七ヶ国の勢力七千余騎を引きつれ、鷹巣城の周辺を 十重二十重に取り囲み、山の麓に三十七の陣地を作って、昼も、夜も攻撃をくりかえしました。

鷹巣城は天然の要塞で、なかなか険しく、容易に攻めることはできません。

時能の甥にあたる快舞や為頼は、時能に劣らぬ豪の者で、時能の可愛がって育てた『犬獅子』と呼ぶ逞くましい犬は、よく飼いなされ、人の言葉も分る程賢い犬であった。

時能は、夜がふけると、この犬をつれ出して、敵のようすを探ぐらせ、敵の備えが嚴重であると、『犬獅子』は 一声 大きく吠えて知らせ、備がなければ、尾を振って主人に合図をして、時能等は、不意に敵の陣地に突進して敵を散々に 痛みつけるなど、夜ごとに策をめぐ

氏は、義助追討の軍勢を越前の国へと送り込んで来た。高経、義助の両軍の戦線は 次第に 拡大し、三月の木田城の攻防は 激戦を極めた。

七月頃になると、尊氏は、義助追討のため、高上野守師治を將として、大軍をつけて、加賀より進撃させ、土岐頼達には、美濃、尾張の兵を率いて、穴馬から大野方面へ進軍。佐々木氏頼には、江州の兵を率いて 木の芽峠から、越前へと進撃させた。高経も 加賀から出発して、それ等の援軍と合し、勢を盛り返して、義助の軍を柚山に攻め、義助の奮戦も空しく、遠く 美濃へと逃がれた。

また、畑時能の守っていた三国湊城も攻め陥され、加賀の畑城へ帰り、その城を守っていたが、十月十九日、賊軍は大兵を以って包囲攻撃し、その城も焼かれてしまった。十月二十七日、遂に、敵を 敗いて、一時 北朝に与し、城を敵にまかせて、越前へ二十七人の兵士を連れて鷹巣城にこもった。

もう この頃になると、柚山城も陥されて、越前、加賀、能登、越中、若狭の五ヶ国にわたる官軍の城は一ヶ所もなくなり、畑時能の籠った鷹巣城だけが 残された只一つの城であった。

一の井兵部少輔氏政は、去年、柚山城から、平泉寺へ

らして、各陣地を次々と荒し廻るので、敵兵は安眠することが出来ず、しまいには、こつそり、略をおくつてきて、自分の陣地へは攻めて来ないように頼んだとさえ言われている。

こうした攻防の中に、元、新田義貞方の部将であった、上木九郎家光が、足利勢の攻口に 畑追討の一番を承けて陣地を築いていた。ところが、誰、言うとなく、上木家光は、畑時能へ数百石の兵糧を送って内通しているという噂が広がった。そして、総大將の足利尾張守高経の陣の前に「畑を討たんと思わば、先ず、上木を伐れ」という、高札を立てた者がいた。これは「畑を打たん（畑を耕すにかけた）と思わば、先ず、植木を伐れ」と巧みに含ませた文句だった。

これから、大將も、上木、には気を許さなくなり、友達仲間も遠去かって行くような空気になったので、上木は、悔しくなって、二月二十七日（興国二年）の早朝に、自分の一族二百余人に、俄に戦準備体制を整えて攻撃を始めたので、他の同輩達が見て「上木は、城の様子をよく 知っているのだから、これは、城に何か落城する条件が調うたのかも知れん。もし、そうだとしたら、上木一人に手柄を一人占めさせるなぐ」というので、三十七ヶ所の陣地の兵士達が、七千人、取

るものも取りあえず、大急ぎで、岩根を伝い、木の根にかじりついて、あの険しい鷹巢城の坂を 十八町程 一気に攻め上って崖の下まで、たどり着いたのに、城の中は シーンと静まり返って「どうなったか様子を見よう。」と、鳴りをひそめていると、枝をつけたまま、木や竹で防禦用に作った垣の近くまでやって来た時、矢筈に、畑時能を始め、所太夫快舞・悪八郎・鶴沢源藏人・長尾新左エ門・児玉五郎左衛門の五人が、各自それぞれ、思い思いの太刀や、長刀の鋒を揃えて、名乗りを上げ、怒鳴り散らして切って出た。今の今まで誰一人、足元にいるとは予想もしていなかったのに、油断して 城内の様子に気を取られ、不注意で近付いた先駆けの百人余りの兵士は、これには、気も動転し、驚き、あわてふためいて、我れがちにと、人を追い越して逃げようとし、一ヶ所にひしめき合っている所へ、例の悪八郎が、八、九尺位もある大木を脇にはさんで、五、六十人かかっても動かされんような大きな石を 転ばしたので、その石にはね飛ばされたり、押しつぶされる様子は、転輪王が現われて歩かれる時、輪宝が前に転がり、山や川を平らにしてしまうように、又、大きな石が卵を圧しつぶすのと、少しも異ならない。

これに元気ついて、左右に飛び替い、八方に打ち払い、

破っては帰り、帰っては進み、散々に切り廻って、或者は討たれ、或者は疵を受けるなどその数は、どれだけの事か分らない程、大勢であった。

それから、後は、もう、寄手の軍勢も、攻めて来る者はいなくなり、只、山を隔て睨み合い。川を境界線にして 遠く、取り巻いて何の動きも見せなかったのも、この儘であつては自滅を待つばかりだと考えた畑時能は、鷹巢城は、大將一井部少輔氏政に十一人の兵をつけて残留させ、自分は、十六人の兵を引き連れて、北郷町伊知地の鷲ヶ岳へ転進することとなった。

鷹巢村史より転載

蘇我・物部二氏の閥族擅權、藤原氏の外戚政治、平氏以來の武家政治、皆此れ我が國體に對する正しき思想が裏はれし爲なりき。然るに前古未曾有の國難元寇を契機とし、國民の自覺は油然而して湧き起り、而して遂に後醍醐天皇の偉大なる御人格により一旦天皇親政の大御代はこゝに實現するを得たるも、大義名分の紊れし當時のこととて問もなく悲しむべき時代となれり。

此所に誠忠比なき畑六郎左衛門時能將軍の存在と、其龍城の鷹巢山の存在こそは、村民の明鏡なると共に村民の誇りなり。

第一節 畑六郎左衛門時能將軍と鷹巢山

〔一〕鷹巢山（城山）

鷹巢村の東天近く巍然として聳ゆる鐘狀の雄姿こそは、南朝の忠臣畑將軍龍城の鷹巢山なり、又城山とも呼べり。標高四百三十七米を有し、丹生山地の前方にありて、大野郡鷲ヶ岳と相對峙し、福井平野を眼下に見下すの要所を占む。吉野拾遺に脇屋義朝朝臣が山中の僧庵に萬里小路藤原卿を尋ねたること見ゆ。山上の平地五十間四方は畑將軍龍城の城跡にして將軍の碑あり。

太平記並に大日本史には鷹巢龍城の武功談が記述せられ又福井藩祖結城秀康の時、望遠塔として烽燧を置いて海上の變に備へしことあり。由來村名も此の山名に因み鷹巢村と名づけたるものなり。

五、鷲ヶ岳と畑時能公

越前平野の真只中を東西に横きつて日本海に注ぐ九頭竜川は、県下三大川の最たるものである。

今、この九頭竜川を遡行して行くと、川の両岸には白山連系の山が、最も狭まった場所の北岸に浄法寺山の流れとしての鷲ヶ岳が聳えている。その山容は正しく、その名の如く、天空へ大鷲が大きな翼を拡げて、羽ばたく雄姿を思わせる風趣がある。

この山の頂上に立って、遙か、九頭竜川の流れ行く、西の彼方に大砲の弾丸を立てたような山が黒々と望まれるが、これが、鷹巣山の遠望である。

今から、凡そ、六百五十年前の日本の国は、殆んど半世紀以上の期間にわたって、戦いに明け、戦いに暮れる動乱の世の中であつた。この時代のことを、南北朝時代と呼ばれている。南北朝時代は、鎌倉時代と室町時代の両時代の間にはさまる時代で、そのころは皇統が、持明院統と太皇太后統の二つに分かれ、幕府の仲裁で、両統が、交互に立つ定めとなつてゐた。

持明院統の花園天皇から皇位を継承された後醍醐天皇は剛毅な性格を具えられていた天皇で、院政を廢止し

これは、全く、後醍醐天皇や、護良親王が画いていた理想とは、相容れない方向へと進展して行つてしまつた。

結局、尊氏の打った布石は、次ぎ次ぎと効を奏し、後醍醐天皇が股肱と頼む新田義貞が灯明寺畷で肥田に落ち、流れ矢にあたつて戦死してからは、北国一帯には官軍は全く見られず、僅かに、畑時能の手兵二十七名の立籠る鷹巣城がただ一つを余すだけという悲惨な状況になつてしまつた。

これも、足利高経の大軍に取り囲まれて持久戦に持ち込まれてはその反攻も、愚策と考え、興国元年（一三四〇年）十月二十一日の夜半、ひそかに、十六騎の兵を引きつれて、平泉寺と豊原寺との中間地点に當る、北郷町伊知地の鷲ヶ岳の險を選んでここにたてこもり、中黒の旗、二流打ち立てて、寄せ手来たらは来たれと待つてゐた。

足利尾張守高経は、まさか、畑時能が軍勢を二つに分けて鷹巣城を抜け出したものとは思ひもよらず、これは、豊原寺、平泉寺の衆徒が、官軍方と通じて、旗上げをしたものと思ひ込み、息つくひまも与えず、二十二日の午前六時には、三千余騎を率いて、押し寄せて来た。始めのうちは、敵の兵力を計らいかねて、一氣呵成には攻めかかる風はなかつたけれども、やがて、敵は小勢だと

て、天皇親政の理想を貫こうと決意され、皇位の決定や、朝政などに干渉する鎌倉幕府を倒す計画を再度に涉つて企てたが、いずれも失敗に終わり、天皇は、元弘元年（一三三一年）八月二十四日の夜、皇居を脱け出して、笠置寺に入り、兵を募つたが、幕府の軍勢のため、捕えられて隠岐に流された。

しかし、こうした再度の倒幕の計画の失敗と、正中の変や、元弘の変は、畿内、近国の武士達をはじめ、一般農民の間に大きな刺激を与えることに効を挙げ、各地に反幕府の氣運を醸成してしまつた。

こうした氣運の中で、皇子、大搭宮護良親王を中心に元弘二年（一三三二年）吉野に倒幕の兵を挙げると、楠木正成は河内の千早城に拠つて之れに応じ、後醍醐天皇は元弘三年（一三三三年）隠岐を脱出して、伯耆の船上山に入り、名和長年等に擁せられて、諸国に倒幕の編目が発せられ、反幕の諸勢力は、一勢に決起し、下野の足利尊氏は六波羅を倒し、上野の新田義貞は鎌倉に突入して、年来の倒幕の目的は達せられ、世に建武の中興が成就したと、後世の人達によつて呼称されている。

倒幕に際し、京都回復の功績は足利尊氏が主たるものではあつたが、尊氏は六波羅を占領すると、鎌倉幕府の発展としての新政府の構想を次ぎ次ぎと実現しかけた。

見届けるや、何の恐れる事もなく、足利の軍勢は、我れ勝ちになつて進んで来た。

この日、時能公は、緋緘の鎧を着て、またがる馬にまで鎧をつけ、何ずれ劣らぬ屈強の兵十六騎を左右に従え、「畑將軍、ここにあり、尾張守（足利高経）殿はいづくにおわするぞ」

と、大音声を張り上げて呼わつた。

やがて、大勢の中へ駆け入り、追ひ廻わし、駆け乱らし、四方八方へ飛びかい、多くの敵兵を馬の脚で駆け散らした。

尾張守高経と荒草兵庫助の二人は、

「敵はたとえ鬼神であろうとも、あの位の小勢を見て退くといふことがあるか、返せ！返せ！」

と、呼わつたので、三千余騎の敵の大軍は、畑時能以下の十六騎を中に取り囲んで、一騎も余さず打ち取れとばかり、入れ代わり、立ち代わり、激しい戦いが展開された。

畑時能の乗った馬は、項羽が馬にも劣らぬ駿馬で、何人かの敵兵はこの馬の蹄にかかつて、踏み殺され、手にする太刀は、大磐石をも斬り通す程の業物で、一打に、一、三人は討ち落さぬことはない。共に従ふ十六騎の兵も、何れ劣らぬ豪の者ばかり、右に、左に、前に、後に、瞬く間に五、六人ずつ薙ぎ倒され、さすがの大軍も、

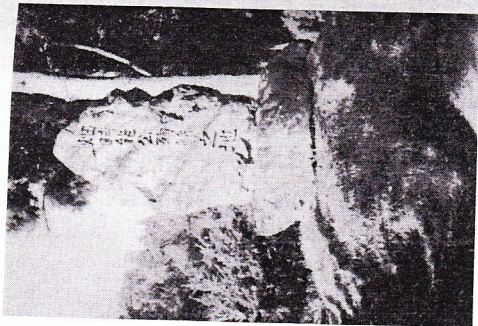
東西南北へと散乱し、九頭竜川を渡って、西の方へと、遠く退いて行った。

戦、すんで、畑將軍が、帷幕の中へ戻って、その兵を集めて見ると、五人は討たれて戦死。九人は深手を負い、その中でも、畑時能が格別に、一騎当千の猛者よと、平生から、頼みとしていた甥の太夫房快舞の受けた切り傷や矢傷が七ヶ所もあって、その日の暮れ方までにとうとう息を引き取った。

畑時能も籠手や向う脛等 大刀傷のない所はなかったが、障子の板の端から飛び込んで来た白羽の矢が肩先へ突き刺り、慌てて矢を引き抜いたけれども、矢は鏃を残し、何としても抜けず、少々傷位には平気で驚かない畑時能も、肩に残っている鏃の苦痛には三日間も、責め苛まされ、喚き、おめきながら、鷲ヶ岳山麓にて、その一生を閉じた。興国二年十月二十五日の夕陽と共に新しい時代への転換を予見しつつ、北郷町の土となったわけである。

太平記の著者は

畑時能の平生の行蹟は 伝える所によると、僧侶を殺して 堂塔仏閣を毀わしたり、善根を施し、修する心は、露塵ほども持たず、悪事をなすことは 山程もあつたばかりに天罰饗面として、流矢にあたつたのだ。しかし、



畑ヶ塚に建立されている石碑

船身一口を獲たりという。

伝う。その当時は、獄魔の台地より、その附近の山腰まで民家ありしが、皆兵乱に罹れりと。今も、館庭の跡を認め得、時々焼米を掘り出すという。

○大日本史

畑時能称六郎左衛門武藏人也云々遂略加賀越前為義貞作声援及義貞戦死使時能保越前湊城北兵攻之歴年時能衆二十三人同死守云々。時能身多被創流矢中肩矢鏃不能出三日死自是北方官軍不復振矣。

○類聚国誌

鷲ヶ岳尾越故城

畑時能死せし所と云う。

外国の事はともあれ、また、畑時能程の勇力智謀に並ぶような人は、日本国には、おらなかつたと言っている。

畑時能公の戦死の後、北陸七ヶ国は全て、足利の支配となり、これから、北国には官軍は 全くなくなつてしまった。

鷲ヶ岳は 九頭竜川の激流を隔てて、北に高く(標高七六九米)聳える険しい山である。

鷲ヶ岳の南の山裾が、九頭竜川にまではみ出ている所を若葉ヶ湖といわれている。その場所には、獅子岩と呼ばれる岩がある。それは、畑公が軍用犬として使っていた、『大獅子』が 殺されて、九頭竜川を流れ、岩に化したものと言ひ伝えられている。

大野郡誌より抜粋 へ一四四五頁

○鷲ヶ岳城跡

伊知地西北の峻嶒頂にあり、四望開濶、真に 形勝の地たり。畑時能の戦没の故址として、世人の耳に熟せり。昨明治四十三年十月、一碑を建て、表に 畑時能の碑、裏に、興国二年十月二十五日戦死と刻せり。

近年、区民山畑を懇きしに、木光武(?)と銘せる

○太平記に豊原の北 伊知地山に拠せり・・・今按するに伊知地山は豊原の東南に在り、鷲ヶ嶽と称す。豊原の北にあらず。

再按するに、伊知知山は 即ち鷲ヶ嶺、吉田郡伊知地村の上に在り。

○城迹考

伊知地城跡、鷲ヶ嶺共、畑六郎左衛門時能 伊知地村山上にあり。

○名勝志

勝山より 二里許り西にあり、畑時能が籠りたる山、

鷲ヶ嶽と云いて、伊知地村より西の方にあり・・・。

此の山の南の麓は黒龍川の流に、若葉湖と云う有り、川中に獅子岩と云う有り、土人云う、畑が飼たる犬獅子、川中にて 殺されたるが、岩と化したると云々。

太平記に豊原の北に当り、伊知地と云う有りとは、誤なり、南なり。

○影響録

此の地、今も、夜半には 折々 争刀の音聞ゆ。小雨などふる夜には、七寸ばかりの円かなる霊火出づ。

○越前名蹟考

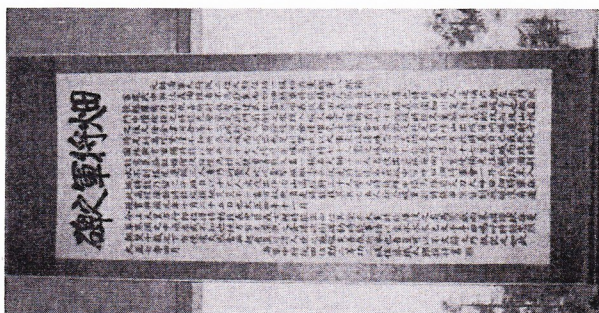
伊知地の里民のいへるは 鷲ヶ岳の絶頂まで、村より 六十町ばかり上は、百余間許四方の平地にて、北

— 23 —

当時、再び建立。宝暦二年（一七五二）壬申歳成就。檀方、今沢市良左衛門、市良右衛門、安左衛門、初惣檀中 当村方他所志の面々助力 用木等寄進人足手伝数々有之

以上

明和九年（一七七二年）壬辰歳三月十六日より、八日までに、夜三日、僧侶一五人にて、高祖大士五百回忌の取越法要を相勤む、音楽（雅楽）を法要中に使用し、当時としては、三百年来にない珍しい群集が参詣。無難の中に勤まり、寺、檀共に恐悦。その砌り、当仏壇の張替、前棹の壁白土、畳の表替が出来た。檀方中の助力、銀 市良左衛門より、一



東郷平八郎並に佐藤鉄太郎の書

すると、天合古仏の内、その初発の古仏で、平城仏教の教義を学習した者が、慶雲寺の開基に関係していたのではなかろうか。初代、清雲法師とは 如何なる僧であったかは 現在では知るに由なく、不明の内に葬り去らねばならない。次の義真大師は、天合宗の開祖、伝教大師（僧 最澄）の高弟で、延暦寺の第二世となった人である。慶妙寺の由緒書によると、この人が越前巡錫の砌り、慶雲寺を天合宗にしたと記してある。それが、天長年中（八二四―八三三年）だとしていて、天合三世円珍が入唐（八五三年）より（二〇）二十九年）先ということになり、これも信頼性に乏しい。

そうすると、第三世通壽権大僧都の開山説が 大きく浮き上ってくる。寺伝によると、通壽を開山としている。

過去帳及び寺伝によると、通壽が京都妙顕寺管長に帰依して、日蓮宗となり、寺を慶妙寺と改称し、自ら初代と称した。この人の墓も、元山王村の方から、現在の寺院墓地に移して吊っている。

畑時能公が、伊知地鷲ヶ岳城の戦いにて戦死し、徒臣の児玉五郎左衛門光信などが、畑時能の首級をこの寺に埋め、当時の住職に、続縁供養してもらったと地元の人たちは伝えている。

こうした経緯から、当寺の境内に、畑時能公の墓地が

八〇匁。平 六四匁。左平太 三〇匁。其の他小家檀方中 惣而 五七〇匁。割合不足銀之所者 世上の香典供養米代、法用、説法之散銭等集 都合銀高六四〇匁也。

相勤める音楽
役人は平等会
寺之末流担頭
七人来り勤む。
楽人供物は
一六〇匁。
其別 福井寺
方面は別に礼
物差出す。

法要差定次

第 左に記す。

初 日 初 伽陀 報恩寺

楽 五 常楽

読 誦 六之巻

（以下略）

こうした由緒書を見ると、本寺の開基は 遠く 養老年中に始まっていて、その所属宗派は、平城仏教の何れかに属していた事になる。山王元村に於いて、このような古い宗派が存在していたことは考えられず、ひょっと

設けられ、東西一〇米、南北八米の高地に、高さ三米の五輪の塔を根廻り四米もある櫓の傍に建立された。

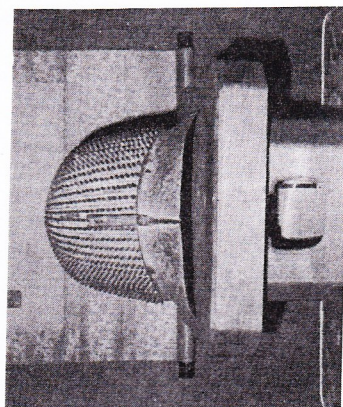
昭和十三年（一九三八年）九月二十四日より二十六日までの三日間、畑時能公の戦死（一三三八）六百年の大祭が執行された。

大導師として、日蓮宗教学部長、島田行啓僧正を管長代理として御親教を仰ぎ、部内僧侶二十余名、村内寺院各宗僧侶を諷経とし、音楽を以て、今沢本家より道中行列をなして、当寺に入場。当村には未だ嘗てない盛大な大法要が営まれた。県知事閣下を始め、県内外の有志等百余名、村内各種団体長、県下日蓮宗団体、村民多数が参加した。費用は、老千四百円也は、今沢東、浅川茂右エ門（村の小学校長）、酒井平大夫、今沢音五郎の各氏が拠出して尽力されたといわれている。

当時には、元師東郷平八郎（海軍中将、佐藤鉄太郎）撰文並びに書になる石碑や、当時の呪と伝えられるものが現存している。

その他、鏡、系図、古文書、記録等は慶應二年と、明治五年の再度の火災により、跡を止めるものは見当らない。

当時の住職の佐藤日省師（四〇祖）の発願で、大正四年五月、墓碑建設会を設立し、浄財を募り、大正六年九月十二日、これを建立した。



当時使用されたといわれる呪

畑時能公墓碑建設会発信字し

恢復ヲ圖ルヲ以テ已ガ任ト爲ス然レトモ衆寡敵セズ遂ニ興國元年十月廿五日鷲ガ岳ニ於テ忠死而シテ其ノ墓ハ山王感妙寺ノ境内ニ在ル事ハ既ニ吉田郡誌ノ記スル所ナリ且ツ往古ヨリ口碑ニ傳テ聞卷ノ兒童モ亦之ヲ語ル然ルニ精舎ハ廢回祿ニ罹リタルヲ以テ將軍ノ墳墓モ此ノ災ヲ被リ石碑破損シテ削奪損壞ヲ繞越シ荒草叢々トシテ墓道ヲ煙没ス嗟忠烈義膽ナル將軍ノ功績ヲ追憶スル人ヲシテ轉々慨嘆ニ堪エナランモ熟ラ想ニ新田氏ハ己ニ別格官幣社ニ列シ社殿千本高ク足羽山ノ上ニ聳エ然シテ墓處モ莊嚴アリテ遠近ノ瞻敬ヲ蒙ラズ威徳益々隆ナリ然ルニ幾多ノ艱苦ヲ嘗メ忠死ヲ共ニセル畑將軍ノ豐域ハ之ニ反シ莽々タル荒草ノ叢中ニ僅ニ墓址存在シテ吊フ人モナク唯鷲ガ岳ノ峰ニ標ク風々タル松濤ト時能川ヲ潺湲ト流ル、水ノ香ノミ長ニ其ノ昔ヲ忍ブモノ、如シ登ニ痛恨ノ至リナラズヤ吾人等俯仰感慨堪ハズ是ニ於テ平素有志者ト共ニ隠レタル將軍ノ英靈ヲ永ク地下ニ慰メ旌忠ノ祭祀ヲ行ヒ國民ノ忠性ヲ喚起致シ度相謀リテ墓碑建設センコトヲ發起セリ冀クハ同感ノ諸君此ノ微意ヲ諒シ旣テ御賛助ヲ與ヘ給ハン事ヲ冀起者一同切ニ希望ス

大正四年五月

〔人起發〕 慶妙寺兼住職 小泉惠順 吉田郡上志比村長 赤井豐城
勸撰貴族院議員 杉田定一 同村前村長 吉田長十郎
上志比村高等小學校長 原喜代松 慶妙寺檀頭 今澤九十郎
前福井縣會議員 鈴木茂左衛門 本門法華宗學林前教授 佐藤日省

〔員助賛〕 吉田郡長 色川紈城 大野郡長 西島岬 福井市長 山品捨録 縣會議員 柳原九兵衛
衆議院議員 今村七平 牧賀郡長 若杉喬 主編井新聞 土生彰 編集部主筆 大島久米之助
編輯部編輯 金森迂仙 縣醫師會 山本匡輔 縣醫師會 大月齊庵 福井中學校長 大島英助
庶見村長 松浦平 參事會 市議員 福田源三郎 建築師 高島正 福井支店長 高橋末太郎
録司補 天津泰岳 權借正 鈴木行泰 工學博士 仙石亮 地方課長 湯澤三千男
縣時評客司 馬場鶴雄 福井市議員 鷺田士三郎 學井井校校長 本多忠綱 學校長 出田新
福井新聞記者 森恒救 福井市議員 諸新平 會井井所 各頭 黑田與八 會社社長 成田藤左衛門
會井井役棟 松島清入 福井市議員 都鄙喜平 市會議員 駒屋節二 勝山町伴野六郎
福井縣議長 志方景美 會井井役棟 八尾新助 新田探大 藤田文哲 市會議員 伊藤紋太郎
衆議院議員 大橋三郎 衆議院議員 八田裕二 陸軍少佐 白石熊雄 市會議員 藤井五郎兵衛
作業者 井田日孝 大津師範 美濃崎泰憲 (次録不備)

畑時能將軍墓碑建設會則

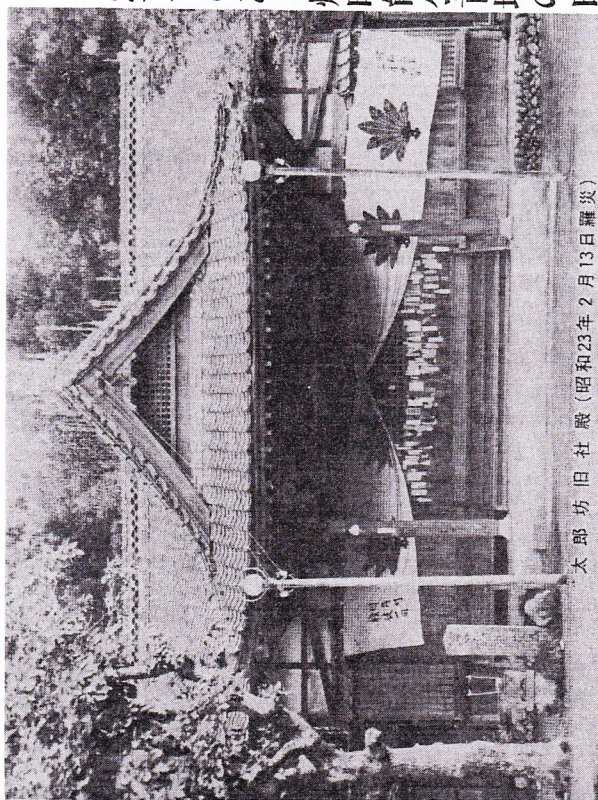
- 第一條 本會ハ畑時能將軍墓碑建設會ト稱ス
第二條 本會ハ畑時能將軍ノ墓碑及ヒ當時忠死ヲ共ニセシ十六騎ノ菩提墓ノ建設ヲ以テ事業トス
第三條 會費ハ壹口金拾錢トシ幾口ニテモ隨意御賛助ヲ乞フ
但シ會費ハ即時若クハ大正 年 月卅日迄ニ吉田郡山王郵便局鈴木茂左衛門方ニ寄附ヲ受クルモノトス
第四條 本會ハ理事一名會計二名幹事若干名ヲ置キ會務ヲ處理ス
第五條 本會ハ畑時能將軍墓碑建設會事務所ヲ福井市相生町百壹番地願本寺ニ置ク

〔幹事〕 小竹惠致 武内久三郎 加藤小太郎
天谷龍二郎 鈴木太吉 三村多右衛門
酒井平吉 小島増右衛門 酒井治三郎
栗田七左衛門 鈴木茂右衛門 三笠治作
楠武介 宮川豐太郎 外數名
會計 鈴木茂左衛門
理事 吉田長十郎
佐藤日省

(算概計設) 圓千壹金一
內 金五百圓
金貳百圓
金壹百圓
金壹百圓
金壹百圓

墓碑影石五輪墓道標石壹基
靈方五、石、垣、玉、垣、植木費
除幕式法會諸費
畑將軍小傳待遇諸費
本會準備諸費

七、陽雲寺にある畑時能公首塚の由来



山陽陽雲寺 太田坊旧社殿(昭和23年2月13日罹災)

号した。

元弘三年(一二三三年)新田義貞はその家臣、四天王の随一といわれた畑時能に命じて、当寺へ、不動尊を建立し、戦勝を祈願して寺領百石を寄附した。これを、新田勝軍不動として伝えた。

長祿元年(一二五七年)二月、天英祥貞の代に曹洞宗に改宗したので、祥貞を中興の開山としている。

寛正三年(一二六二年)三月には、関東管領職であった上杉民部大輔顯定(上州平井城主)が、足利将軍義政に申請して、寺領二百五十石を買い、この時から、足利家と上杉家の祈願書となった。

明応元年(一四九二年)五月に、大畠長門守昌広が、この地に南城を築城した時、一時は、この寺を東の方に移転させたが、大永四年(一五二四年)大畠家が没落したので、享祿元年(一五二八年)三月、齊藤左エ門尉盛光は、南城を毀つて、元通りにこの寺を復旧して寺領も維持することができた。

天文九年(一五四〇年)七月、齊藤摂津守定盛は、七堂伽藍を造営して満願寺を崇来寺と改めた。

天正十年(一五八二年)三月、武田勝頼は天目山に敗れて、甲斐源氏の武田一族は滅亡した。そして、織田信長の勢威は拡大の一途を辿り、天下に号令する機運が到来

埼玉県の地には、昔、知々夫国造と、牟邪志国造が置かれていた。大化の改新によって、武蔵国と呼ばれるようになり、国府が多摩地域に置かれ、『前多摩』と呼ばれていたのが、埼玉になったといわれている。

奈良時代に朝鮮半島から、多くの帰化人が移民して、南部に、高麗郡、新羅郡が設置された。これらの帰化人は、銅の産出、織物、手工業など、地域の開発と文化の発展に貢献した。

平安時代の末期には、広大な荘園を背景に武蔵七党、関東八平氏といわれる関東武士、坂東武者発祥の地ともいわれている。

今、面積三、八〇〇㎢、人口、五三三万の首都圏として、都市化の進む中で、秩序ある発展を目指して、整備計画や総合振興計画などが進められている。

東京練馬のI・Cから関越自動車道を北上して、埼玉県の最北端、本庄児玉I・Cで、本庄市を通り抜け、北西にある児玉郡上里町金久保字松原にある曹洞宗陽雲寺は、弘仁十二年(八二〇年)五月、円仁慈覚大師創立になるものである。その当時は天台宗延暦寺の末寺で、満願護国寺と称していたが、元久二年(一一〇五年)四月十五日、京都の人で、建仁寺二代の明全和尚が、この寺の再建を行い、臨済宗建仁寺の末寺となり、唄樹山満願寺と

した事を自他共に許していた時である。天正十年五月、信長は伊勢長浜の城主、滝川左近將監一益に、上野一國と信州佐久、小諸の二郡を与えて関東管領職に任命し、尚、手柄次第で奥羽地方までも約束して出馬を命じた。それまでは、上野国は全て小田原の北条氏の支配下にあったが、一益は先ず箕輪の本城に手勢八千騎と共に金団子の馬印を掲げ、自慢の軍配を右手に短軀で肥満の重々しい勇姿で入城した。そして、直ちに上州勢の各部將に檄を飛ばして銘々各々から、当時のならわしとして人質を取り、磐石の勢力体勢を固めた。そして、上州領、鷹巣、金山、館林、小股、倉賀野、白倉、藤岡、安中、高山、五閑、小泉、石倉、長根、大戸、木部、和田、那波の各諸將の参集を命じて、昨日六月七日に早馬のしらせによると、六月二日に、織田信長父子が、京都の本能寺で、明智光秀の謀叛によって、自刃されたと告げ、その弔合戦のため、上洛するが、それには先ず小田原城主 北条氏直の出足を挫くことが必策である。それで、織田信長親子が目刃したことを北条方にも知らせ、厩橋城(前橋)を相渡し度しと誘いの早馬通報を差し出し、北条氏来陣すれば戦斗開始は必至である。だから諸將等は約一万騎の軍勢の調達方を頼むと命令。各部將もこれを了承して、直ちにその準備に取りかかった。これで手勢の八千を加